発達障害患者の自分探しの支援を実施して
～長期化入院からの退院支援～

五稜会病院

吉田　貴史、吉野賀寿美、鈴木　大輔

はじめに

広汎性発達障害の特徴

・円滑な対人関係の構築困難
・社会性の獲得困難

等人間の基本的な機能の発達遅滞を特徴とした発達障害の一種である。

事例紹介

A氏　男性　20代前半
診断名：双極性障害、広汎性発達障害
・16歳で発達障害と診断。

・中学でいじめにあい、高校に進学するが、すぐに退学

・20歳以降当院に転院。自立を目標にｸﾞﾙｰﾌﾟﾎｰﾑなどの入所を試みるが上手くいかず。

・自立への不安、父親の死といったストレス源が要因となり暴力、暴言見られ入院となる。

「同年代の人達は学校を卒業してちゃんと仕事に就いているのに自分は何をやっているんだろう･･･」

入院後の経過

病状の緩和、スキルの向上を優先目標とした時期

①不調を上手く伝えられなくても看護師に相談する。
②無理をせず頓服は使う。
③思いを言語化できるようSSTの参加。
④状態を見ながらA氏の院内での可能な行動拡大をしていく。
（外泊、デイケアの通所、単独での院内散歩等）
⑤行動拡大を図りながら退院に向けた準備ができる。

結果

・不調の言語化、外出、外泊も早期より実施。
・状態安定に伴い開放病棟の転棟もしていった。

・将来への不安、自己嫌悪感を訴える多さは変わらず、破壊行為、2階からの飛び降りなどの衝動行為が見られた。
・状態に応じ開放病棟、慢性期閉鎖病棟、急性期閉鎖病棟の転棟を繰り返し、入院約5ヶ月が経過してしまった。

退院支援を優先目標とした時期

・目標、A氏へのアプローチ方法

①具体的なイメージができるよう複数の就労支援施設を見学しに行った。
②実際に気に入った場合、就労支援施設の体験入所を行っていくこととした。

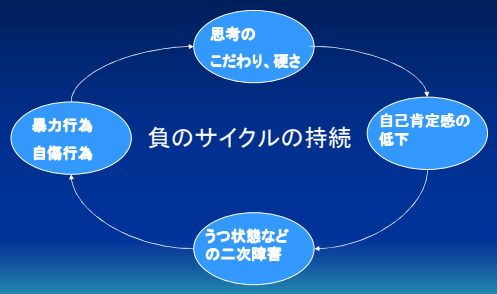
結果

・見学した就労支援施設を退院後に入所することを決めた。
・入所予定の就労支援施設の体験入所を行っていった。

・時折将来への不安を訴えるが説明や目標の確認で納得できるようになった。
・退院支援以外の看護師の関わりにも目を向けるようになった

考察

１自分探しに苦しんだ要因



「自己否定」+「自立へのこだわり」⇒「自分探し」

２、退院に結びついた理由

・病状の緩和、生活スキルの向上を優先させた時期はA氏が目標としている「自立」や退院と関連付けるのが難しかったため、上手くいかなかった可能性が高い。

・退院支援を優先し、実際に就労支援施設を見学したことで退院、自身の目標である就労や一人暮らしといった「自立」に対しての具体的なイメージがついた。

結論

①想像力の欠如がある発達障害の患者には具体的なイメージを構築できる働きかけが必要である。
②A氏が求めていた個別的なニーズを考慮しながらケアを行った事が「自分探し」の支援となった。
③「自分探し」というこだわりはA氏の失敗体験から生まれた「自己否定」が根底になっていた。

御清聴ありがとうございました。